

# 千島列島における人類活動史の考古学的総合研究 (I)

## —特に北方四島の先史文化研究を中心に—

右代啓視・鈴木琢也・竹原弘展・スコヴァティツィーナ, V. M.

Key Words 縄文文化期 (Jomon culture period)、続縄文文化期 (Zoku-Jomon culture period)、擦文文化期 (Satsumon culture period)、黒曜石産地分析 (Obsidian source analysis)、史跡 (Historic site)

### 1 はじめに

北海道からカムチャツカをつなぐ千島列島は、旧石器文化からはじまり、アイヌ文化にいたるまでの人類活動史について空白の研究領域であり、基礎的なデータが欠落している地域である。しかも、北海道の先史文化あるいはアイヌ文化の研究にとって、東の千島ルートは北のサハリンルートと同様に北海道で異文化の交差を明らかにできる要素をもっている。そこには、歴史的な画期や文化変容、過去の自然環境の変遷、自然資源の活用史など、千島列島における歴史・文化の解明につなげる基礎的研究の推進が重要となってくる。

千島列島を含めた北方四島の研究は、「北方文化共同研究事業」の一環として、2005年（平成17）～2009年（平成21）にかけ本格的に取り組むこととした。右代・鈴木ほか（2008、2010）は、この研究で歴史・文化資源の活用の可能性を探ることを目的に国後島古釜布郷土博物館の収蔵資料を中心とする先史時代の遺跡群の時代性と文化遺産の活用について明らかにしてきた。さらに、そこで北海道や北方四島の先史文化資源をつうじた文化交流や歴史教育の推進、観光資源への活用など様々な展開が期待できることを指摘した。このことを実現するためには、遺跡や史跡などの埋蔵文化財の基礎的研究が必要であり、人類が遺した文化遺産を調査し、時代、種類、規模などを記録することや歴史認識をロシア側の研究者と共通のものにすることが求められる。そこには、北方四島の領土問題をこえる歴史学（地域史）や考古学、民族学的な研究はもとより、日本史や世界史にまで展開できる重要な文化遺産が存在するからである。

この研究成果を踏まえ、2010年（平成22）～2013年（平成25）まで「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり」として、研究プロジェクトを立上げ実施してきた。また、外部資金として科学研究費補助金（基

盤研究B）「千島列島における先史文化の考古学的基礎研究—特に北方四島を中心に—」（研究代表者：右代啓視）、科学研究費助成基金助成金（基盤研究C）「古代日本列島北部地域における文化集団の移動に関する基礎研究」（研究代表者：鈴木琢也）などを使用し実施してきた。右代・鈴木ほか（2011、2012、2013、2014、2015）は、この研究プロジェクトを中心に北方四島における先史文化の基礎データ収集のため、国後島と色丹島での遺跡調査と、古釜布郷土博物館を拠点とする北方四島の郷土史、民族学、民俗学、歴史学などの専門家との学術交流を進めてきた。この研究成果として、第一に、国後島、色丹島の現地調査により遺跡の分布やその特性など基礎データを収集することができた。国後島では65カ所、色丹島では22カ所の遺跡を確認した。これは、考古学で戦後はじめての大きな成果であり、今後、両島の未調査地域を調査することでさらに遺跡数が増えることは確実である。また、千島アイヌに関する現地調査や国内調査を実施してきた。特に、千島アイヌの特徴的な民族資料として、国内に現存する植物製民具であるテンキを集成し、基礎的なデータを報告した。第二に、学術的な交流をつうじ、文化遺産の重要性、歴史認識など両地域間の博物館交流を進めてきた。これは、北方四島の専門家との共通課題として北海道と北方四島の「歴史・文化・自然環境の活用」をテーマに、文化財保護、史跡、博物館などの調査をつうじ、博物館の運営や経営、持続可能な管理体制、文化財保護の実態、先史文化を含む北海道史など多くの情報を提供し、将来に向けた両地域の歴史・文化活動について議論してきた。特に、アイヌ民族の歴史・文化については、北海道の各地域の博物館に収蔵している民族資料や有形・無形文化財の保存・保護の状況、または伝承活動の状況などを共同で調査した。この学術交流をつうじ、歴史・文化の認識、文化財保護の思想、博物館の資料管理、展示手法、教育普及活動など

の運営や経営など、共通する多くの視点がもてたことが最大の成果である。例えば、北方四島と知床半島の歴史・文化・自然など共通する環境にあることから、人類が共有しなければならない文化遺産がこの地域、または千島列島全域に存在することなどの認識がもてた。さらに、2010年（平成22）から遺跡や史跡を文化財保護と歴史学習の活用として、国後島の小学生が遺跡の草刈りを行い、現地で先史文化の歴史学習などが実施されるようになった。このように、学术交流でえた成果が学校教育や社会教育の現場で積極的に運用されるようになった。

このように、北方四島では様々な制限があるなか研究成果を着実にあげてきた。さらに研究を発展させるため、新たに「北方四島の考古学研究」とした総合研究プロジェクトを立上げ、2015年（平成27）から4カ年の計画で本研究を実施することとした。本研究は、北方四島を含めた千島列島の人類活動史を総合的に明らかにすることを大きな視座として、特に北方四島の先史文化を同島の研究者と共同研究することで共通の認識をもつことが第一の目的である。第二に、この研究プロジェクトをつうじ学术交流を進め、両地域の博物館交流や歴史認識をさらに深め、学术交流の友好関係を進展させることを目指すものである。

ここでは、2015年に実施した北方四島の現地調査と学术交流、これまでの調査でえた試料の分析について、考察を加え報告することとする。

## 2 北方四島の遺跡調査

これまで、北方四島での考古学的調査は先にも示したか2005年（平成17）～2014年（平成26）にかけ継続的に研究プロジェクトを組織し実施してきた。この北方四島の考古学的調査は、右代・鈴木ほか（2008、2010、2011、2012、2013、2014、2015）で積極的に、その成果を報告してきたところである。そのなかで千島アイヌのテンキの物質文化的な研究では、アリューシャン列島、さらには北米大陸との文化的な交流、民族的な接触で成立する可能性も指摘できる。さらに、右代（2014a、2014b）は、千島列島に北方四島を含めた先史文化について、国後島と色丹島の先史文化をみると連綿と文化が築かれていたわけではなく、後期旧石器文化、縄文文化、続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化と、その文化のなかでも限られた時期にしか遺跡が存在しないことを総合的に指摘した。また、北方四島には、カムチャツカ半島地域の物質文化の影響を受けた遺物がみられることを指摘するとともに、確実に中部千島までは縄文文化晩期、続縄文文化の遺跡が存在すること、さらにオホーツク文化は北千島まで拡がりをもつこと、アイヌ文化はこの地

域に特徴的にみられる内耳土器がカムチャツカ半島南部まで拡がりをもつこと、アイヌ文化のチャシは北千島まで拡がりをもつことを指摘してきた。

これらの研究成果を基に、新たに進める本研究の北方四島の現地調査は、これまでと同様に内閣府、外務省をはじめ、北方四島交流北海道推進委員会などとの協力、連携をはかり「ビザなし交流・専門家交流事業」の枠組みのなかで実施することとした。特に、北方四島の国後島、色丹島の未調査地域、これまで調査を実施できなかった択捉島、歯舞群島を積極的に実施することとし、4カ年の現地調査を実施することとした。

ここに報告する第1次学術調査は、この研究プロジェクトとして2015年（平成27）7月23日～7月27日にかけて、特に国後島中部太平洋側の未調査地域や南部地域の再調査などの遺跡調査を実施した。この調査で新たに発見した遺跡は、次のとおりである（表2）。

### (1) 国後島の遺跡調査

現在、国後島は古釜布、泊地区にはロシア人が在住し、この地域以外は自然保護地区となっている。遺跡は保存状態が良く、発見されていない遺跡も多く存在する。本調査は、国後島古釜布郷土博物館スコヴァティツィーナ、V.M.館長と共同で実施した。

#### 1) チクニ川右岸台地遺跡

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する海岸段丘、標高約5～6mの台地上に位置し、遺跡はチクニ川で切られる海岸段丘の右岸台地にある（図1-66、表2-66、写真1）。遺跡の位置は、北緯44°9'4"、東経145°56'26"である。ここでは、竪穴住居址1軒を確認した。竪穴住居址の形状は円形で、規模は径約5.3m、深さは約1mである。時期については竪穴住居址の形状から縄文文化～続縄文文化の時期と考えられる。

#### 2) チクニ川左岸台地遺跡

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する海岸段丘、標高約3～4mの台地上に位置し、遺跡はチクニ川で切られる海岸段丘の左岸台地にある（図1-67、表2-67、写真2）。遺跡の位置は、北緯44°9'4"、東経145°56'26"である。ここでは、竪穴住居址1軒を確認した。竪穴住居址の形状は円形で、規模は径約5m、深さは約1mである。時期については竪穴住居址の形状から縄文文化～続縄文文化の時期と考えられる。

#### 3) オボロセ台地1遺跡

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する海岸段丘、標高約10～11mの台地上に位置し、遺跡はオボロセ川と2本の沢で切られる海岸段丘南側の台地にある（図1-68、表2-68、写真3）。遺跡の位置は、北緯44°9'36"、東経145°58'12"である。ここでは、竪穴住居址1

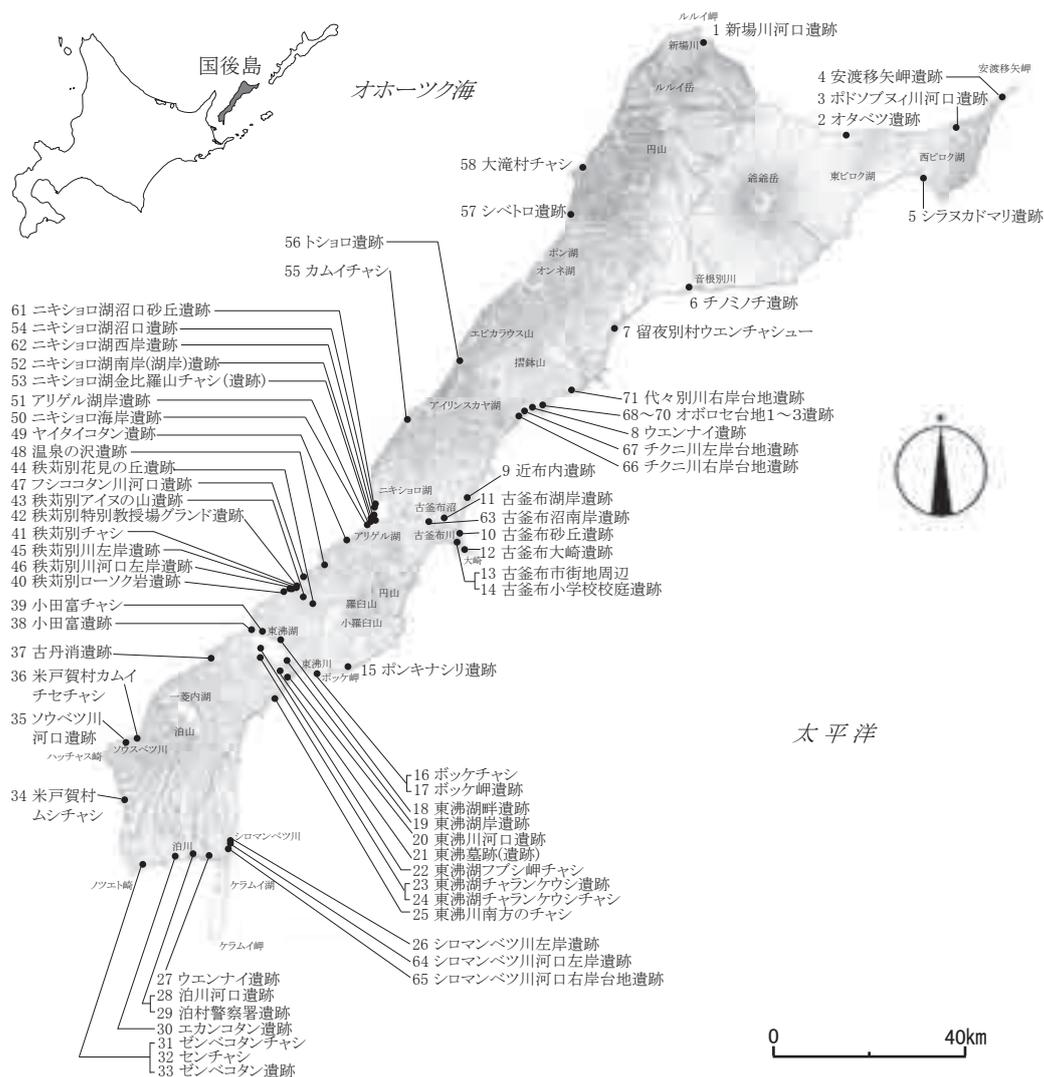


図1 国後島の遺跡分布

(59:マイアチヌイ川河口遺跡、60:ベスノイマイアチヌイ川河口遺跡は、遺跡の位置を未確認である。国土地理院、数値地図50000、北方四島の一部を使用)

軒を確認した。竪穴住居址の形状は方形で、規模は約6.3m×6.4、深さは約1.5mである。時期については竪穴住居址の形状から擦文文化の時期と考えられる。

#### 4) オボロセ台地2遺跡

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する海岸段丘、標高約10～11mの台地上に位置し、遺跡はオボロセ川と2本の沢で切られる海岸段丘中央の台地にある(図1-69、表2-69、写真4)。遺跡の位置は、北緯44°9'37"、東経145°58'13"である。ここでは、竪穴住居址3軒を確認した。竪穴住居址の形状は円形で、規模は径約3.9m、3.9m、2.5m、深さは約1m～1.5mである。時期については竪穴住居址の形状から縄文文化～続縄文文化の時期と考えられる。

#### 5) オボロセ台地3遺跡

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する海岸段丘、標高約11～12mの台地上に位置し、遺跡はオボロセ川と2本の沢で切られる海岸段丘北側の台地にある(図1-70、表2-70、写真5)。遺跡の位置は、北緯44°9'38"、東経145°58'13"である。ここでは、竪穴住居址1軒を確認した。竪穴住居址の形状は円形で、規模は径約3m、深さは約0.5mである。時期については竪穴住居址の形状から縄文文化～続縄文文化の時期と考えられる。

#### 6) 代々別川右岸台地遺跡

この遺跡は、国後島中部、太平洋側に発達する海岸段丘、標高約11～12mの台地上に位置し、遺跡は代々別川で切られる海岸段丘の右岸の海岸台地にある(図1-71、表2-71、写真6)。遺跡の位置は、北緯44°10'

表1 国後島の遺跡一覧(1)

番号	遺跡名	遺跡の時期										遺構	出土遺物	備考			
		旧石器	縄文草創期	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	統縄文	オホーツク文化	擦文文化				アイヌ文化		
1	新場川河口遺跡							○	○	○			遺物包蔵地	統縄文土器、オホーツク式土器、突起付磨製石斧、ナイフ	2006年調査		
2	オタバツ遺跡								○	○	○		遺物包蔵地	宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、トビニタイ土器	2006年調査		
3	ポドソプヌィ川河口遺跡								○	○			遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、オホーツク式土器	2006年調査		
4	安渡移矢岬遺跡								○				遺物包蔵地	靴形石器、ナイフ、スクレーパー、ドリル	2006年調査		
5	シラヌカドマリ遺跡												竪穴住居址				
6	チノミノチ遺跡(チャシ)												竪穴住居址 チャシ(土壘)				
7	留夜別村ウエンチャシ											○	チャシ				
8	ウエンナイ遺跡												竪穴住居址				
9	近布内遺跡										○	○	○	遺物包蔵地	宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C <sub>2</sub> ・D式土器、オホーツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査	
10	古釜布砂丘遺跡(古釜布アイヌ地)													竪穴住居址	幣舞式土器、三日月形石器	2006、2010、2011、2012、2015年調査	
														竪穴住居址	興津式土器、石匙		
															墓		後北C <sub>2</sub> ・D式土器、石匙、石槍、石鏃(無柄)、ガラス玉、人骨
				○		○	○	○	○	○	○			○	竪穴住居址		オホーツク式土器
															竪穴住居址		ガラス玉、小玉(ジャスパール製)
															遺物包蔵地		オホーツク式土器、有角石斧、ガラス製玉 北筒式土器、縄文後期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C <sub>2</sub> ・D式土器、オホーツク式土器、ナイフ、擦り付磨製石斧、突起付磨製石斧、磨製石斧
11	古釜布湖岸遺跡(古釜布湖付近)											○	竪穴住居址	オホーツク式土器			
12	古釜布大崎遺跡												竪穴住居址		2012年調査		
13	古釜布市街地周辺	○										○	遺物包蔵地	有茎先頭器、宋銭(景德元宝)、鉄鍋、人骨			
14	古釜布小学校校庭遺跡											○	竪穴住居址	蕨手刀(?)			
15	ボンキナシリ遺跡											○	○	遺物包蔵地	オホーツク式土器		
16	ボッケチャシ												○	チャシ(塚)			
17	ボッケ岬遺跡													竪穴住居址			
18	東沸湖畔遺跡											○		竪穴住居址	土器、石器、骨		
														遺物包蔵地	縄文土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器		
19	東沸湖岸遺跡(東沸川岸遺跡)													竪穴住居址	縄文晩期土器	2006年調査	
														竪穴住居址	後北式土器		
															竪穴住居址		オホーツク式土器
															遺物包蔵地		統縄文土器、後北C <sub>2</sub> ・D式土器、擦文土器、トビニタイ土器、石槍、靴形石器
20	東沸川河口遺跡(東沸遺跡)													竪穴住居址	縄文土器	2006年調査	
						○		○	○	○	○		竪穴住居址	オホーツク式土器			
														遺物包蔵地	北筒式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C <sub>2</sub> ・D式土器、トビニタイ土器、靴形石器、突起付磨製石斧		
21	東沸墓址(遺跡)												墓	墓標			
22	東沸湖フブシ岬チャシ												○	チャシ(2重の塚)			
23	東沸湖チャランケウシ遺跡												○	竪穴住居址			
24	東沸湖チャランケウシチャシ												○	遺物包蔵地	煙管		
25	東沸湖南方のチャシ												○	チャシ(土壘)			
26	シロマンベツ川左岸遺跡											○	遺物包蔵地	幣舞式土器	2006年調査		
27	ウエンナイ遺跡												竪穴住居址				
28	泊川河口遺跡(泊遺跡)													竪穴住居址		2007年調査	
						○		○	○	○		遺物包蔵地	北筒式土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、石鏃、ナイフ、ドリル、突起付磨製石斧				
29	泊村警察署遺跡												○	遺物包蔵地	突起付磨製石斧		
30	エカンコタン遺跡												○	遺物包蔵地	統縄文土器、オホーツク式土器	2010年調査	
31	ゼンベコタンチャシ(ゼンベコタン砦址)												○	チャシ(2重の塚)			
32	ゼンチャシ(ゼン砦址)												○	チャシ(2重の塚)			
33	ゼンベコタン遺跡												○	竪穴住居址			
34	米戸賀村ムシチャシ												○	チャシ			
35	ソウスベツ川河口遺跡(ソウスベツ川)													○	墓	石鏃、人骨、銅銭(穿孔あり)	
														○	遺物包蔵地	寛永通宝	
36	米戸賀村カムイセセチャシ												○	チャシ			

表2 国後島の遺跡一覧 (2)

番号	遺跡名	遺跡の時期								遺構	出土遺物	備考		
		旧石器	縄文草創期	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	続縄文				オホツク文化	擦文文化
37	古丹消遺跡								○	○	○	竪穴住居址 遺物包蔵地	オホツク式土器 縄文土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C <sub>2</sub> ・D式土器、オホツク式土器、擦文土器、石斧、石器	2006年調査
38	小田富遺跡								○	○	○	竪穴住居址 墓 遺物包蔵地	土器片、銅銭(穿孔あり)、木炭、灰、焼土 太刀、鐔、装飾品(銀製)、銅銭(穿孔あり)、石鏃 幣舞式土器、下田ノ沢式土器、後北C <sub>2</sub> ・D式土器、オホツク式土器	2006年調査
39	小田富チャシ										○	竪穴住居址(方形、3ヶ所) チャシ(2重の塚)		
40	秩苅別ローソク岩遺跡											遺物包蔵地	人骨	
41	秩苅別チャシ										○	チャシ		
42	秩苅別遺跡特別教授場ブランド遺跡										○	遺物包蔵地	土器片、太刀、鐔、人骨、銅銭(穿孔あり)、銅銭(清の光著帝(徳宗)32年、1906年)	
43	秩苅別アイヌの山遺跡											竪穴住居址		
44	秩苅別花見の丘遺跡											竪穴住居址		
45	秩苅別川左岸遺跡								○			竪穴住居址	後北C <sub>2</sub> ・D式土器	2009、2011年調査
46	秩苅別川河口左岸遺跡									○		遺物包蔵地	オホツク式土器	2009、2011年調査
47	フシココタン川河口遺跡(フシココタン川付近)											竪穴住居址		
48	温泉の沢遺跡										○	竪穴住居址(方形と円形、計3ヶ所) 遺物包蔵地	石鏃、黒曜石製石器、太刀	
49	ヤイタイコタン遺跡								○	○		遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、鈴谷式土器、オホツク式土器	2006年調査
50	ニキシヨロ海岸遺跡								○	○		竪穴住居址 遺物包蔵地	縄文晩期土器群、石製小玉、有柄石鏃 宇津内式土器、下田ノ沢式土器	
51	アリゲル湖岸遺跡(ニキシヨロシブチャリ川付近)								○	○	○	竪穴住居址 遺物包蔵地	縄文晩期土器、石匙、炭 縄文晩期土器群、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器、石匙、有柄石鏃、無柄石鏃	2006、2010年調査
52	ニキシヨロ湖岸遺跡(ニキシヨロ湖付近)								○	○	○	竪穴住居址 石塚 遺物包蔵地	オホツク式土器 有柄石鏃(縁が鋸歯状、赤褐色)、石鏃(黒曜石製) 縄文晩期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、擦文土器、トビニタイ土器、ドリル、スクレーパー、石鏃、石槍、突起付磨製石斧	2006年調査
53	ニキシヨロ湖金比羅山遺跡(チャシ)									○	○	竪穴住居址 チャシ(2重の塚)	オホツク式土器 太刀	2012年調査
54	ニキシヨロ湖沼口遺跡									○	○	貝塚 墓	オホツク式土器、鉄鍋 盤石、人骨	2010、2012年調査
55	カムイチャシ										○	チャシ		
56	トシヨロ遺跡											竪穴住居址		
57	シベトロ遺跡					○	○	○	○	○	○	遺物包蔵地	北筒式土器、縄文後期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C <sub>2</sub> ・D式土器、オホツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査
58	大滝村チャシ										○	チャシ		
59	マイアチヌイ川河口遺跡(地点不明)											遺物包蔵地	ドリル、ナイフ	2006年調査
60	スベノイマイアチヌイ川河口遺跡(地点不明)						○		○	○		遺物包蔵地	縄文後期土器、後北C <sub>2</sub> ・D式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査
61	ニキシヨロ湖沼口砂丘遺跡									○		竪穴住居址、貝塚		2012年調査
62	ニキシヨロ湖西岸遺跡									○	○	竪穴住居址		2010年調査
63	古釜布沼南岸遺跡											遺物包蔵地	剥片(黒曜石)	2010年調査
64	シロマンベツ川河口左岸遺跡									○		遺物包蔵地	オホツク式土器	2011年調査
65	シロマンベツ川河口右岸台地遺跡			○					○			遺物包蔵地	石刀鏃、つまみ付きナイフ、続縄文土器	2011年調査
66	チクニ川右岸台地遺跡											竪穴住居址(円形1)		2015年調査、縄文
67	チクニ川左岸台地遺跡											竪穴住居址(円形1)		2015年調査、縄文
68	オボロセ台地1遺跡									○		竪穴住居址(方形1)		2015年調査
69	オボロセ台地2遺跡											竪穴住居址(円形3)		2015年調査、縄文
70	オボロセ台地3遺跡											竪穴住居址(円形1)		2015年調査、縄文
71	代々別川右岸台地遺跡								○	○		竪穴住居址(円形7、フライパン形3、方形2)	下田ノ沢式土器、後北C <sub>2</sub> ・D式土器、石器類	2015年調査、縄文

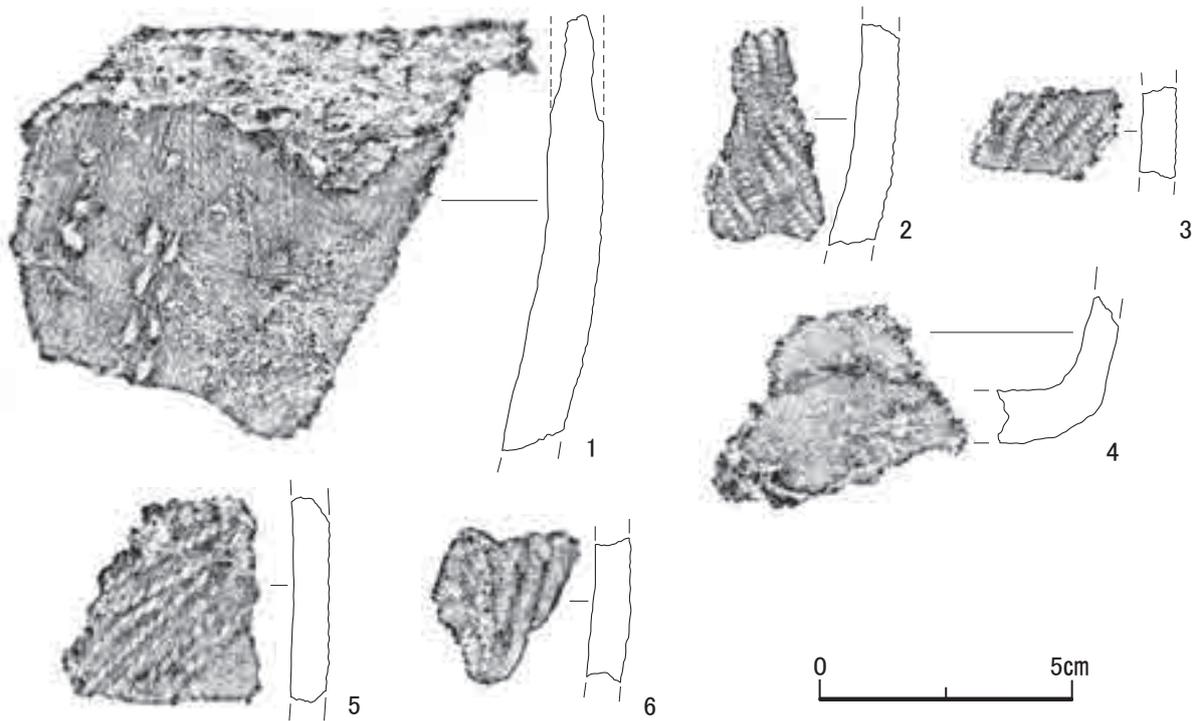


図2 国後島代々別川右岸台地遺跡から採集した土器片

29°、東経146°0'23"である。ここでは、竪穴住居址12軒を確認した。竪穴住居址の形状は、方形が2軒、円形が7軒、フライパン形が3軒である。この代々別川右岸台地遺跡は、川にそって段丘に上る幅約4mの道路がつけられ、遺跡が部分的に破壊されている。竪穴住居址の形状から方形2軒が擦文文化、円形7軒が縄文文化～続縄文文化、フライパン形3軒が続縄文文化の時期と考えられる。これらの竪穴住居址の分布は、方形、フライパン形は川にそって分布し、円形は遺跡全体に広がっている。これらの竪穴住居址の規模は、方形が海岸部から5.90m×5.30mと8.20m×7.60mで、それぞれの深さが約1.5mである。フライパン形は、海岸部から順に径は約7.30m、7.10m、5.10mで、張出部を入れると順に約9.70m、9.70m、7.0m、深さが約1.5～1.7mと大型の竪穴住居である。円形の竪穴住居址は、小さな規模で径が2.40m、大きな規模で径が5.60mで、深さは約0.5～1mである。

この遺跡では、道路で破壊されている露頭で土器6点と石器類3点を収集した。遺物を収集した露頭は、海岸部に近いフライパン形の竪穴住居址の張出部分の一部が道路で切られ破壊されており、この竪穴住居址に伴う遺物と包含層の遺物と考えられる。遺物は、以下のとおりである。

①土器は、続縄文文化の下田ノ沢式土器で図2-1～3が胴部片、図2-4が底部片である。これらの土器片図2-1～

4は、フライパン形の竪穴住居址に伴うものと考えられる。図2-5土器は、続縄文文化期の胴部片で形式については特定できない。図2-6の土器は、続縄文文化の後北C2・D式土器の胴部片である。この図2-5・6の土器は、包含層に伴う土器である。

②石器は、写真7-7がナイフの破損品であり、写真7-8がスクレーパーの破損品であり、写真7-9が使用痕のあるフレイクである。写真7-7の計測値は、縦(1.9)cm×横(2.3)cm×厚さ0.6cmである。写真7-8の計測値は、縦(4.1)cm×横(1.6)cm×厚さ0.8cmである。写真7-9の計測値は、縦2.1×横3.2×厚さ0.4cmである。この石器類は、フライパン形の竪穴住居址に伴うものと考えられる。

以上、現地調査の成果として、新しく確認した遺跡は、縄文文化、続縄文文化、擦文文化の時期であり、国後島でこれまで確認した遺跡に6カ所を加えた(図1、表2)。また、この地域の遺跡立地の環境として、海岸段丘を切る沢や川の右岸台地に竪穴住居址が多くみられる傾向がある。今回、国後島の遺跡調査では、中部太平洋側の地域以外に南部の泊地区、秩父荊別地区、島登地区を再踏査した。泊地区の調査は、竪穴住居址群とチャシの遺跡情報を元島民からえたことから所在調査を行ったが確認できなかった。秩父荊別地区では、現地のロシア人が収集した擦文土器と石器類が出土した遺跡の所在調査を実施したが、確認にはいたらなかった。この秩父荊別地区では、これまで擦文文化の遺跡は確認されておらず、遺

表3 黒曜石産地推定の石器類・原石試料一覧

No.	採集・収集地域	採集・収集遺跡	時期	石器	備考
1	カムチャツカ半島	アヴァチャ多重層遺跡	新石器文化	フレーク	2000.9.28.調査(No.1)
2	カムチャツカ半島	アヴァチャ多重層遺跡	新石器文化	フレーク	2000.9.28.調査(No.2)
3	国後島	古釜布砂丘遺跡	続縄文文化	フレーク	2008.8.2.調査
4	国後島	古釜布沼南岸遺跡	続縄文文化	フレーク	2010.5.29.調査
5	色丹島	マタコタン2遺跡	続縄文文化	フレーク	2012.9.11.調査
6	色丹島	マタコタン3遺跡	縄文文化	フレーク	2012.9.11.調査
7	色丹島	チボイ1遺跡	縄文文化前期	フレーク	2012.9.15.調査
8	色丹島	チボイ3遺跡	続縄文文化	フレーク	2012.9.15.調査
9	カムチャツカ半島	エッソ村	現代 (民族資料)	スクレーパー	2000.9.26.収集
10	カムチャツカ半島	ペトロパブロフスク・カムチャツキー	現代	円礫片	2000.9.30.採集、円礫
11	カムチャツカ半島	産地不明	現代	角礫片	2014.寄贈、角礫

跡の確定が重要であった。また、島登地区は未踏査地域であり、現地では遺跡調査を行ったが確認はできなかった。今後の課題とし、情報を収集し再調査を検討するものである。

### 3 北方四島とカムチャツカ半島の黒曜石分析

北海道、千島列島、カムチャツカ半島の地域で確認されている黒曜石原産地は、北海道で白滝、赤井川などの12カ所、カムチャツカ半島で数カ所あり、千島列島では今のところ確認されていない。したがって、ここでは遺跡から出土した黒曜石の原産地を推定する。この原産地推定の目的は、先史時代の旧石器文化、縄文文化、続縄文文化、オホーツク文化、擦文文化をつうじ、黒曜石の流通がどのように行われてきたかを明らかにし、時期ごとに遺跡で展開されていた人的な交流や交易などを人類活動史の一つのデータとすることである。また、カムチャツカ半島の黒曜石原産地データがないため、その原産地データを収集し明らかにする目的もある。

ここでは、これまで千島列島～カムチャツカ半島の遺跡から収集した黒曜石製の石器類の黒曜石原産地、民族資料として収集した石器と、新たにカムチャツカ半島の黒曜石原産地で採集してきた原石データについて、エネルギー分散型蛍光X線分析装置で元素分析を行い、原産地推定とカムチャツカ半島の原産地を検討した。また、分析データについては、定量的な蓄積が必要であるが、表3に示した分析試料点数は計11点で、カムチャツカ半島の遺跡1カ所2点と民族資料1点、国後島の遺跡2カ所2点、色丹島の遺跡4カ所4点、さらにカムチャツカ半島の黒曜石原産地で採集した資料2カ所2点である。また、カムチャツカ半島における黒曜石原産地の基礎データは無く、今回の分析データは基礎的なデータの一つとなるものである。

#### (1) 分析試料と採集・収集の遺跡と原産地

分析試料の採集・収集地域は、カムチャツカ半島、国

後島、色丹島の遺跡や黒曜石原産地のものである。表3に示すとおり、カムチャツカ半島ではアヴァチャ多重層遺跡から収集した2点(表3-1・2)、エッソで収集した民族資料1点(表3-9)、ペトロパブロフスク・カムチャツキーと産地不明ではあるが原産地で採集した2点(表3-10・11)、国後島では古釜布砂丘遺跡1点、古釜布沼南岸遺跡1点、色丹島ではマタコタン2遺跡1点、マタコタン3遺跡1点、チボイ1遺跡1点、チボイ3遺跡1点である。

① アヴァチャ多重層遺跡の試料は、2000年(平成12)9月28日にカムチャツカ半島の遺跡調査をした時に収集した資料である(写真8-1・2)。アヴァチャ多重層遺跡は、ペトロパブロフスク・カムチャツキーの北東郊外約10km、アヴァチャ川の多数ある河口の最北に位置し、新石器時代から歴史時代の時期の三つの文化層が確認された集落である。杉浦(2000)にこの遺跡の報告があり、デコヴァ、T. M.が1985年に調査したものである。この遺跡からは、2点のフレークを分析した。分析した試料は、表3-1(縦1.8×横2.2×厚さ0.3cm)がやや透明な黒曜石、表3-2(縦1.8×横0.9×厚さ0.3cm)が透明度をもたない黒曜石である。

② エッソ村(ピストル地区)の試料は、2000年(平成12)9月26日に、先の目的と同様に調査を行った時に収集した民族資料で、エベン民族が使用していた黒曜石製のスクレーパー1点である(写真8-9)。この資料は、柄に装着し皮なめし(トナカイの皮)として現役で使用していたものを収集したものである。現在では、一般的に鉄製のスクレーパーが使用されている。この試料は表3-9(縦5.4×横5.2×厚さ3.3cm)で透明度がなく、ブルーグレー色の黒曜石である。この黒曜石は、エッソに原産地があり特徴的なものである。

③ 古釜布砂丘遺跡の試料は、2008年(平成20)8月2日に調査を行った時に収集した資料である(右代・鈴木ほか 2010、写真8-3)。この収集した石器(フレーク)1点は、続縄文文化の後北C2・D式土器とともに収集したものである。この試料は表3-3(縦1.8×横1.5×厚さ

0.4cm) で透明度がない黒曜石である。

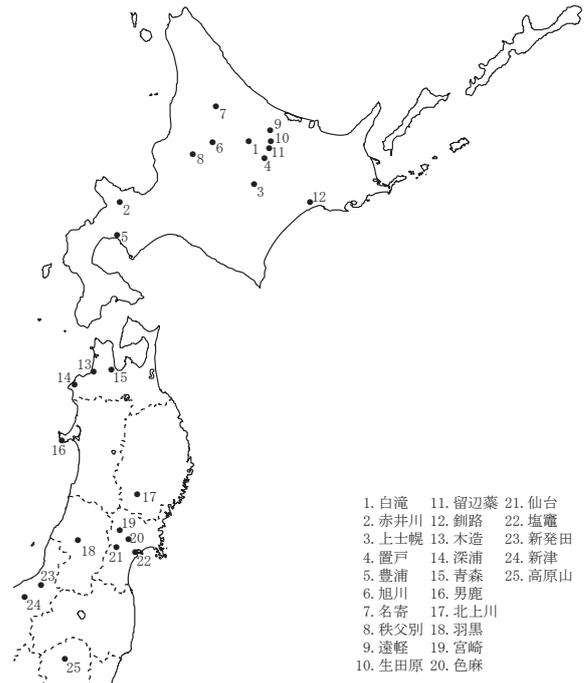
④ 古釜布沼南岸遺跡の試料は、2010年(平成20)5月29日に調査を行った時に収集した資料である(右代・鈴木ほか 2011、写真8-4)。収集した石器(フレーク)1点は、縄文文化から続縄文文化の時期と考えられるものであり、明確な時期は特定できない。この試料は表3-4(縦2.5×横2.3×厚さ0.6cm)でやや透明な黒曜石である。

⑤ マタコタン2遺跡の試料は、2012年(平成24)9月11日に調査を行った時に収集した資料である(右代・鈴木ほか 2013、写真8-5)。収集した石器(フレーク)1点は、続縄文文化の土器とともに収集したものである。続縄文文化の土器は型式までは特定できなかったが、縄文の原体からそれを判断した。この試料は表3-5(縦1.9×横1.7×厚さ0.3cm)で濃いグレー色の黒曜石である。

⑥ マタコタン3遺跡の試料は、2012年(平成12)9月11日に調査を行った時に収集した資料である(右代・鈴木ほか 2013、写真8-6)。収集した石器(フレーク)1点は、縄文文化から続縄文文化の時期と考えられるものであり、明確な時期は特定できない。この試料は表3-6(縦2.4×横2.1×厚さ0.9cm)で透明度のない円礫面をもつ黒曜石である。

⑦ チボイ1遺跡の試料は、2012年(平成12)9月15日に調査を行った時に収集した資料である(右代・鈴木ほか 2013、写真8-7)。収集した石器(フレーク)1点は、縄文文化の前期前半の温根沼式土器とともに収集したものである。この試料は表3-7(縦1.3×横0.8×厚さ0.2cm)で透明度をもつ黒曜石である。

⑧ チボイ3遺跡の試料は、2012年(平成12)9月15日に調査を行った時に収集した資料である(右代・鈴木ほか 2013、写真8-8)。収集した石器(フレーク)1点は、続縄文文化の土器とともに収集したものである。続縄文文化の土器は型式までは特定できなかったが、縄文の原体からそれを判断した。この試料は表3-8(縦1.3×横1.1×厚さ0.2cm)で透明度をもつ黒曜石である。



- 1. 白滝 11. 留辺蘂 21. 仙台
- 2. 赤井川 12. 釧路 22. 塩竈
- 3. 上土幌 13. 木造 23. 新発田
- 4. 置戸 14. 深浦 24. 新津
- 5. 豊浦 15. 青森 25. 高原山
- 6. 旭川 16. 男鹿
- 7. 名寄 17. 北上川
- 8. 秩父別 18. 羽黒
- 9. 遠軽 19. 宮崎
- 10. 生田原 20. 色麻

図3 東日本黒曜石原石採取地

⑨ ペトロパブロフスク・カムチャツキーの試料は、2000年(平成12)9月30日に、カムチャツカ調査を行った時に採集した黒曜石の円礫片1点である(写真8-10)。この試料は表3-10(縦4.1×横3.3×厚さ1.3cm)でやや透明度があり、細かな球顆状構造がみられる黒曜石である。この黒曜石は、ペトロパブロフスク・カムチャツキー市街のアヴァチャ湾北東岸で採集した円礫片であり、内陸に原産地がある。

⑩ カムチャツカ産の試料は、プタシンスキー、A.V.氏(カムチャツカ国立大学)が採集した黒曜石を2014年(平成26)に寄贈を受けたものである(写真8-11)。この試料は表3-11(縦6.7×横7.2×厚さ3.5cm)で部分的に透明であるが、ほとんどが黒色の黒曜石である。この黒曜石は、カムチャツカ産ではあるが、原産地を特定で

表4 測定値および産地推定

No.	採集・収集地域	採集・収集遺跡	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log Fe K	判別群
1	カムチャツカ半島	アヴァチャ多重遺跡	208.9	103.6	2741.0	344.9	961.3	226.7	1221.3	12.52	3.78	34.90	1.12	産地不明1
2	カムチャツカ半島	アヴァチャ多重遺跡	154.7	77.0	2038.2	247.0	670.1	157.8	864.3	12.74	3.78	34.55	1.12	産地不明1
3	国後島	古釜布砂丘遺跡	257.9	76.2	1859.9	704.2	392.1	326.4	822.1	31.37	4.10	17.47	0.86	所山
4	国後島	古釜布沼南岸遺跡	269.7	87.9	1774.9	847.1	96.6	395.5	524.0	45.46	4.95	5.19	0.82	白滝2
5	色丹島	マタコタン2遺跡	274.5	81.3	1978.7	764.5	429.3	358.2	907.3	31.09	4.11	17.46	0.86	所山
6	色丹島	マタコタン3遺跡	188.0	55.2	1336.4	503.9	131.8	237.6	393.4	39.78	4.13	10.41	0.85	白滝1
7	色丹島	チボイ1遺跡	62.2	15.5	402.1	136.8	74.9	59.5	152.1	32.32	3.85	17.69	0.81	所山
8	色丹島	チボイ3遺跡	207.9	59.0	1510.0	567.7	304.1	259.6	632.2	32.19	3.91	17.25	0.86	所山
9	カムチャツカ半島	エツソ村	218.0	97.0	1745.1	325.7	1242.9	172.2	984.8	11.95	5.56	45.60	0.90	エツソ
10	カムチャツカ半島	ペトロパブロフスク・カムチャツキー	248.6	120.3	1112.6	465.6	314.5	232.3	726.6	26.78	10.81	18.08	0.65	アヴァチャ湾北東岸
11	カムチャツカ半島	産地不明	247.3	69.8	870.6	421.1	250.3	207.4	595.6	28.56	8.01	16.98	0.55	産地不明2

きなく、参考資料として分析を行った。

## (2) 分析方法

先に示した分析試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面を洗浄した。分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットがロジウム (Rh)、X線検出器がSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 $\mu$ Aであり、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月1999)。この方法では、各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計7元素のX線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算した。

- ① Rb分率:  $Rb強度 \times 100 / (Rb強度 + sr強度 + Y強度 + Zr強度)$
- ② Sr分率:  $Sr強度 \times 100 / (Rb強度 + sr強度 + Y強度 + Zr強度)$
- ③  $Mn強度 \times 100 / Fe強度$
- ④  $\log (Fe強度 / K強度)$

そして、これらの指標値を用いた二つの判別図(判別図①:横軸Rb分率—縦軸 $Mn強度 \times 100 / Fe強度$ の判別図、②:横軸sr分率—縦軸 $\log (Fe強度 / K強度)$ の判別図)を作製し、各地の原石データと遺跡出土遺物(黒曜石製石器類)のデータを照合して、産地を推定した。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出することから、形状、厚みなどの影響を比較的受けにくく、非破壊分析で実施できる利点がある。また、厚みは、かなり薄くても測定可能ではあるが、0.5mm以下では影響を免れないという指摘もある(望月1999)。したがって、極端に薄い試料の場合は、K強度が相対的に強くなるため、 $\log (Fe強度 / K強度)$ の値が減少する傾向がある。さらに、風化した試料の場合でも、 $\log (Fe強度 / K強度)$ の値が減少するという指摘がある(望月1999)。このことから試料の測定面は、なるべく平坦で綺麗な面を選んで実施した。

特に、原石試料は採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象の試料と同様の条件で測定するが、ここでは、先の条件を満たしているため非破壊で測定した。

## (3) 原産地推定の分析結果

表4に試料の測定値および算出した指標値を示し、図4の黒曜石原石判別図に、分析した試料の指標値をプロットして示した。図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んで示した。

分析の結果、カムチャツカ半島の試料3点は、いずれも異なる位置にプロットされ、別々の判別群と考えられる。ここでは、仮に表3-9をエツソ群、表3-10をアヴァチャ湾北東岸群、表3-11を産地不明群とした。また、表3-1・2のアヴァチャ多重層遺跡採集の2点は、先の3ヶ所の原石群とは一致しなかったが、同遺跡の2点の分析値は互いに近い位置にプロットされており、同一判別群と考えられる。ここでは、仮にアヴァチャ多重層遺跡とした。国後島、色丹島採集の石器6点は、1点が白滝1群(白滝エリア)、1点が白滝2群(白滝エリア)、4点が所山群(置戸エリア)の範囲にプロットされた。

図4には、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示した。カムチャツカ半島の黒曜石製石器および原石は、5点を分析した結果、四つの判別群に分かれており、未知の産地が多く存在することが予想される。

すなわち、この分析結果から北方四島の国後島、色丹島の遺跡から収集した石器は、①白滝エリア産、置戸エリア産の黒曜石が使用されており勇別川中流域と常呂川上流域の産地のものであることが推定できた。②このことから、白滝、置戸産の黒曜石原石が湧別川、常呂川の流域、オホーツク海沿岸域あるいは内陸をつうじ、国後島と色丹島に人的な移動でもち込まれたことが明らかとなった。③今のところ、カムチャツカ半島の黒曜石原産地の黒曜石は、国後島、色丹島では確認できず、黒曜石の人的な移動はなかったと考えられる。

また、この分析結果は、数的にも時期的にも、また遺跡の数についても限られたデータであり、今後定量的な分析データが求められることは当然である。ここでは、あくまでも現在の分析データでの判断である。今後より多くの分析を行い基礎データの収集を行い検討していくものである。

## 4 学術交流

学術交流は、北海道内で博物館調査、史跡調査を共同で実施することとした。この学術交流は、外務省の「ビザなし交流・専門家交流事業」の研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。招聘した専門家は、国後島古釜布郷土博物館のスコヴァティツィーナ、V.M.館長(考古・民俗学)をはじめ、南クリール地区行政府のグルシコヴァ、G.U.文化課長(郷土史)、択捉島郷土博物館のヴィノグラドヴァ、K.V.研究員(郷土史)、サハリ州郷

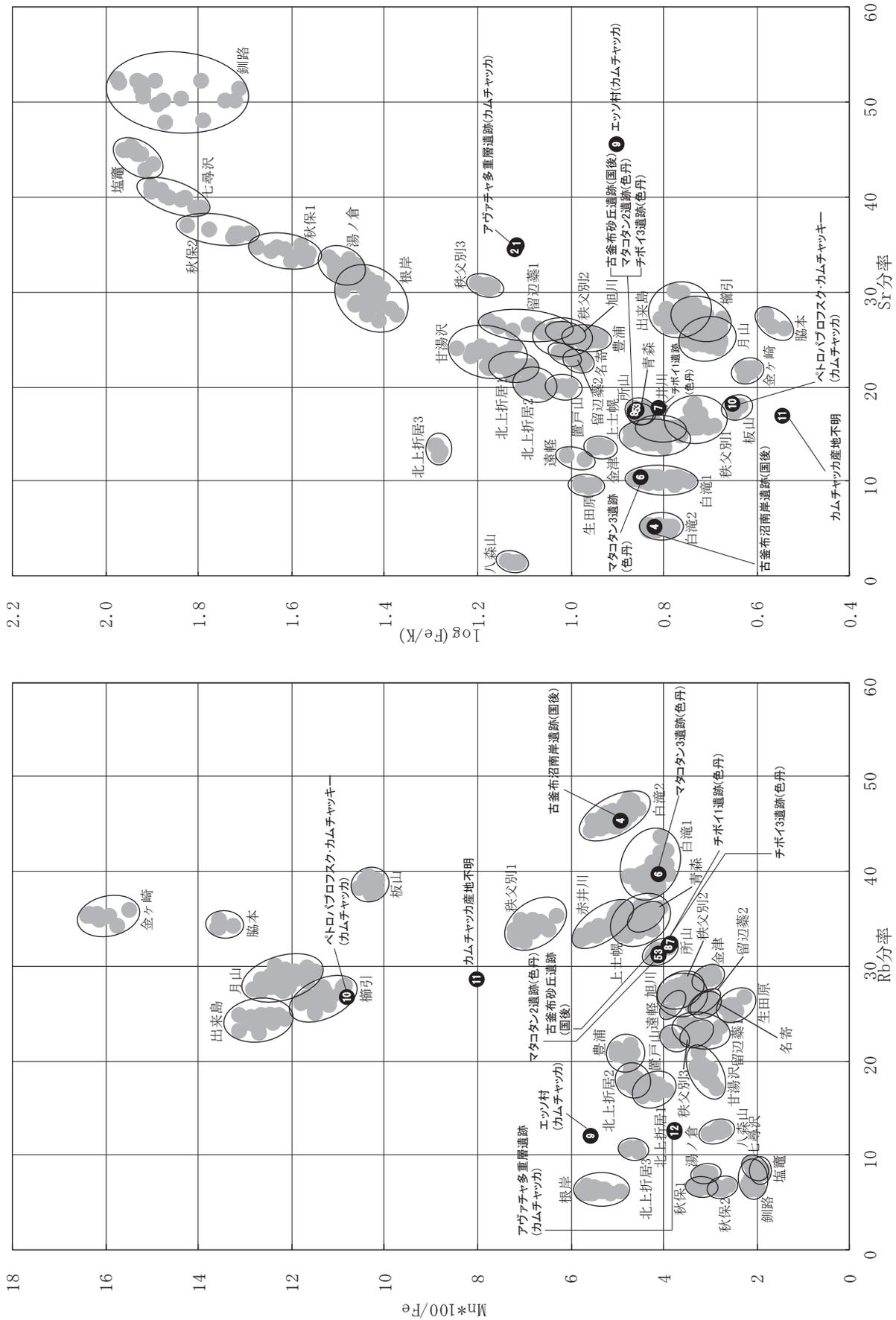


図4 黒曜石産地推定判別

土博物館のヴィシネフスキー、N.V.館長が加わり共同調査を実施した。この共同調査は、北海道と四島の専門家の博物館交流として実施しているもので、今回は北海道開拓記念館から北海道博物館へのリニューアルの状況と共通の課題である北海道の歴史・文化、史跡保存、他の博物館の運営など、現地調査を行なうこととした。学術的な交流の目的は、第一に北海道の歴史・文化がどのように認識されているか、第二に史跡がどのように保存され活用されているか、第三に北海道内の博物館がどのような方法で持続可能な管理・運営をおこなっているかである。

この調査は2017年（平成27）9月17日～9月21日の5日間であり、北海道内の札幌市、小樽市、余市町の博物館や史跡などの調査を実施した。共同調査で訪問した施設は、北海道博物館、北海道開拓の村、小樽市総合博物館、小樽市手宮洞窟、小樽市忍路環状列石、余市町よいち水産博物館、余市町宇宙記念館、余市フゴッペ洞窟、旧下ヨイチ運上屋で文化財の保護、地域での活用などを調査した。

## (1) 博物館調査

博物館の調査では、北海道博物館のリニューアル後の総合展示、資料収蔵の状況、野外博物館である北海道開拓の村の建物と展示の管理状況、中核都市の博物館の管理・運営などの現状を把握することを目的とし、博物館が地域に果たす役割について検討する機会とした。

### 1) 北海道博物館

ここでは、館長表敬で博物館のリニューアルや研究プロジェクトの成果など意見を交わし、国後島発見の岩面刻画の共同研究が提案された。さらに、総合展示が新しくなったことから展示の手法や展示デザイン、ユニバーサルデザイン、さらに照明、展示温湿度の管理などについて情報を収集した。また、資料の収蔵状況やスペースについて情報を提供した（写真9）。また、博物館の管理・運営の体制や指定管理者制度の導入など、意見を交わし情報を集めていた。また、北方四島の歴史でもある特別展示「夷酋列像－蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界－」を観覧した。

### 2) 北海道開拓の村

ここでは、野外博物館の施設管理状況や管理・運営、指定管理者の業務について情報を収集していた（写真10）。特に、旧開拓使工業局庁舎を国指定文化財へ登録する経緯やメリットについて意見を交わした。また、歴史的建造物の持続的な管理や保存、博物館が観光とどのように係るか、興味深く情報を交換した。

### 3) 小樽市総合博物館

ここでは、小樽市の特徴でもある鉄道の交通史や実物

の蒸気機関車、列車などの展示について、興味をもち情報を収集していた（写真11）。さらに、野外の展示では、重要文化財である旧手宮鉄道施設や蒸気機関資料館の展示、蒸気機関車の運行などに興味をもち観覧した（写真12）。また、小樽市総合博物館の本館と分館の役割、小樽市の歴史的街並みと観光との連携で博物館が果たす役割、施設の維持管理や運営について興味深く情報を集めた。

### 4) 余市町よいち水産博物館

ここでは、町レベルで旧福原魚場、旧下ヨイチ運上屋、大谷地貝塚、フゴッペ洞窟、西崎山環状列石と多くの国指定や北海道指定の史跡を有することから、よいち水産博物館が担う役割や維持管理、施設運営など多くの意見を交わした。また、企画展や収蔵資料の管理について情報をえていた。特に、NHK朝の連続ドラマの影響で来町者が増え、博物館施設も連動し利用者増につながり、観光と歴史・文化の整備と強化は町の活性化につながるなど、観光と文化資源の活用は重要であるとの認識をもった。

### 5) 余市町宇宙記念館

ここでは、これまでの宇宙開発の歴史や科学的な展示など興味深く観覧した（写真13）。特に、アメリカとロシアの宇宙開発、さらには国際的な共同開発などの情報を収集していた。また、この記念館のなかに余市町の文化財の展示コーナーがあり、町全体で行う文化活動に注目していた（写真14）。

このように博物館の調査では、主に北海道の歴史・文化、現在の史跡保存について現地調査を実施した。特に、北方四島の専門家は、この調査をつうじ歴史・文化などの展示、資料の収蔵状況、管理・運営、史跡保存と活用など、国後島古釜布郷土博物館や択捉島郷土博物館の展示のあり方や運営・活動、さらには文化行政の振興につながるように位置づけたいとの考えをもった。さらに、歴史・文化遺産は観光と強く結びつき、博物館の重要な役割の一つとしての認識をもった。

## (2) 史跡・遺跡調査

先の博物館調査などでも示してきたが、この地域の文化遺産である史跡を調査した。小樽市では、総合博物館に隣接する手宮洞窟の保存施設と展示手法についてと忍路環状列石の野外展示の状況を視察した（写真15）。余市町では、フゴッペ洞窟（写真16）、旧下ヨイチ運上屋（写真16）を視察した。これらの史跡整備状況や保存環境などを調査し、フゴッペ洞窟や手宮洞窟の岩面刻画を保存する施設のシステムや岩面刻画の展示について、一体的な文化財保護と具体的な活用を現地で調査するなど、文化財保護の重要性を知る機会となった。

しかも、北方四島の専門家から提案された岩面刻画の共同研究は、岩面刻画が2015年夏に国後島古釜布の海岸で発見されたばかりであり、この刻画の時期、帰属する文化、刻画の技法など、国後島郷土博物館はもとよりサハリン州郷土博物館においても解明しなければならない課題とされているものである。このことから、サハリン州郷土博物館のヴィシネフスキー、N.V.館長より、今回の学術交流で国後島の岩面刻画の共同研究が提案され、このプロジェクトとしても今後、共通の課題の一つとして取り組むこととした。

また、札幌市の中心では、北海道庁旧本庁舎（赤レンガ庁舎）や「旧札幌農学校演武場」（札幌時計台）についても視察し、都市型歴史的建造物の保存と活用について、展示や利用者などの状況を調査した。また、利用者については、中国や韓国などからの海外の観光客が多いことに注目していた。

この学術交流では、史跡や遺跡が北方四島にも当然あり、共通の歴史・文化資源であり重要な文化遺産であることから、このような学術的研究交流を実施することの重要性を実感する機会となった。しかも、北方四島の専門家は北方領土問題を越えた歴史・文化の学術交流の活動が、今後も両地域の歴史・文化研究の振興をはかり、領土問題を解決するためにも重要であり、必要であることを認識していることは大きな成果でもある。

## 5 おわりに

これまで、2015年（平成27）に実施した本研究の成果と学術交流の概要について示してきた。第1次学術調査は、国後島の考古学的調査、学術交流として専門家を招聘し、博物館や史跡を中心とした調査を実施した。この研究成果は、北方四島で継続的に考古学的調査を実施してきたことにあり、国後島中部太平洋側海岸域で6カ所の遺跡を確認した。確認した遺跡は、全て新たに発見したものである。これは、北方四島の歴史や先史文化を知る大きな手掛かりとなる基礎データである。確認した遺跡の保存状態は良好であり、発掘でえられる考古学データは計り知れないものが予測される。

さらに、人類活動史を探る一手段として、これまで収集、採集した試料11点の黒曜石産地推定のデータを報告した。特に、カムチャツカ産の黒曜石については、基礎的なデータがなく、報告したデータが唯一のものである。今後、定量的にデータを増やし、人類活動史を探る手がかりとしていくものである。

学術交流である専門家招聘では、継続して北方四島との共通の課題である博物館交流、史跡・文化財の保護、両地域の歴史・文化の認識など北海道内で調査を実施し

た。この調査では、北方領土問題を越えた歴史・文化の交流の重要性、文化遺産の大切さなど、同一的な認識のもとで進めることができた。

本研究が果たす学術交流の役割と、北方四島の専門家が果たす役割については、多くの様々な課題が山積しているのが現状である。しかしながら、この学術交流ではこれまでの交流で理解できるように、課題解決にむけた理解が一層、深まってきているのも事実である。人的な学術交流はもとより、博物館交流の課題としては歴史・文化的な情報の共有化や展示活動、文化財資源の評価、文化財資源の整備・活用、収蔵資料の保存活用など、基礎的な整備が重要になってくることは間違いない。将来的には課題解決の一つとして、遺跡の地形測量、さらに発掘調査など、共同で実施できることを願っている。これは歴史・文化の解明、歴史教育の資源としても計り知れない成果が期待できる。また、発掘調査は、現地での学校教育の教材として、地域の社会教育的な資源として活用されることは確実であろう。

この研究が果たす学術交流の役割は、このように北方四島の歴史・文化遺産の認識を深め、文化財保護活動や博物館活動を推進することで北方領土問題の解決に大きく貢献できるものと期待している。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、北地文化研究会北構保男博士にご指導と、これまで有意義なご助言をいただいた。現地調査では、南クリール地区行政関係者の方々、通訳の木村邦生氏、垣内与氏、外務省欧州局ロシア課事務官廣幡幸治氏、城野啓介氏、本間悟氏、内閣府北方対策室、北方領土問題対策協会、関係諸氏にご協力、ご支援をいただいた。学術交流の専門家招聘では、訪問先の小樽市総合博物館の石川直章館長、佐藤卓司氏、余市町よいち水産博物館浅野敏昭館長、小川康和氏、乾芳宏氏にご指導、ご協力をえた。また、北方領土対策根室地域本部、北方領土復帰期成同盟などの機関、ならびに関係諸氏にはご協力を賜った。ここに記して、感謝とお礼を申し上げるしだいである。

なお、本研究の北海道の博物館・史跡調査は、外務省「ビザなし交流・専門家交流事業」研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。また、科学研究費補助金（基盤研究（B）、課題番号23320174、研究代表者：右代啓視）「千島列島における先史文化の考古学的基礎研究—特に北方四島を中心に—」、科学研究費助成基金助成金（基盤研究（C）、課題番号25370900、研究代表者：鈴木琢也）「古代日本列島北部地域における文化集団の移動に関する基礎研究」の一部を使用し実施した。

## 引用・参考文献

- 望月明彦 1999. 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2. 上和田城山遺跡篇. pp. 172-179. 大和市教育委員会.
- 杉浦重信 2000. カムチャツカ半島の南東部のアヴァチャ湾周辺の遺跡. 北海道北方博物館交流協会誌 12: 31-35.
- 右代啓視 1982. 動物意匠を施した注口・把手付のオホーツク土器. 北海道史研究 30: 52-54.
- 右代啓視・手塚 薫 1991. ウルップ島アリュートカ湾岸出土の遺物. 北の歴史・文化交流研究事業中間報告. pp. 79-86. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視 1996. 千島列島採集の考古資料-長尾又六コレクション-. 根室市博物館開設準備室紀要 10: 71-90.
- 右代啓視 2014a. 北方四島の考古学的研究. 飯島武次編. 中華文明の考古学. pp. 409-424. 同成社.
- 右代啓視 2014b. 新・千島紀行-発見された千島列島の先史文化-. 函館市北方民族資料館. 函館市文化・スポーツ振興財団.
- 右代啓視 2014c. オホーツク文化にシャマニズムを探る. 鈴木克彦編. シャマニズムの淵源を探る. pp. 113-140. 弘前学院大学地域総合文化研究所.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2008. 国後島の遺跡-古釜布郷土博物館所蔵資料調査より-. 北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史-2005-2007年度調査報告-. pp. 161-182. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一 2010. 国後島における先史文化の資源利用. 北方の資源をめぐる先住民と移住者の近現代史. 北方文化共同研究報告. pp. 125-140. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2011. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (I). 北海道開拓記念館研究紀要 39: 99-110.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2012. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (II). 北海道開拓記念館研究紀要 40: 143-154.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高島孝宗・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2013. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (III). 北海道開拓記念館研究紀要 41: 59-82.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2014. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (IV). 北海道開拓記念館研究紀要 42: 97-126.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2015. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (V). 北海道開拓記念館研究紀要 43: 37-66.



写真1 チクニ川右岸台地遺跡



写真2 チクニ川左岸台地遺跡



写真3 オボロセ台地1遺跡



写真4 オボロセ台地2遺跡



写真5 オボロセ台地3遺跡



写真6 代々別川右岸台地遺跡



写真7 国後島代々別川右岸台地遺跡出土の土器片・石器類 (S=2/3)

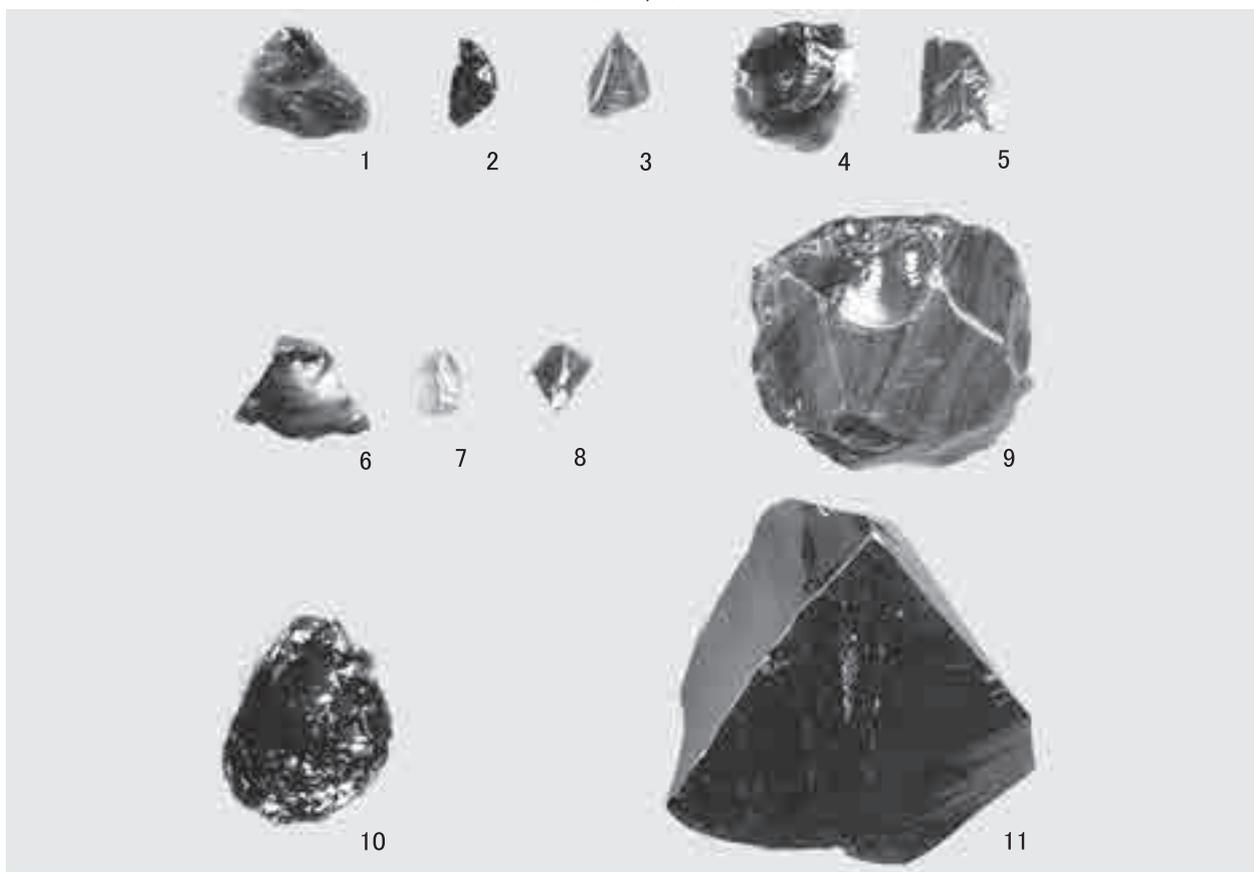


写真8 黒曜石産地推定石器類・原石試料 (S=2/3)

1・2:カムチャツカ半島アヴァチャ多重層遺跡、3:国後島古釜砂丘遺跡、4:国後島古釜布沼南岸遺跡、5:色丹島マタコタン2遺跡、6:色丹島マタコタン3遺跡、7:色丹島チボイ1遺跡、8:色丹島チボイ3遺跡、9:カムチャツカ半島エツソ村、10:カムチャツカ半島ペトロパプロフスク・カムチャツキー、11:カムチャツカ半島



写真9 北海道博物館



写真10 北海道開拓の村



写真11 小樽市総合博物館



写真12 小樽市総合博物館・手宮  
鉄道施設



写真13 余市宇宙記念館



写真14 余市宇宙記念館の文化財  
展示コーナー



写真15 忍路環状列石  
(国指定史跡)



写真16 フゴッペ洞窟  
(国指定史跡)



写真17 旧下ヨイチ運上屋  
(国指定史跡)

---

## Comprehensive Archeological Research on the History of Human Activity on the Kuril Islands (I):

With Particular Focus on the Research of Prehistoric Culture of the Four Northern Islands

Hiroshi USHIRO, Takuya SUZUKI, Hironobu TAKEHARA, and V. N. SUKOVATITSYNA

---

The Kuril Islands, which stretch between Kamchatka and Hokkaido, is a region that lacks fundamental data – an empty domain regarding the research of the history of human activity from the Paleolithic culture to the Ainu culture. However, as far as the research of Hokkaido's prehistoric and Ainu culture is concerned, an important factor is that it is clear that like the Sakhalin route to the north, the Kuril route to the east also crossed with different cultures.

Therefore, this research – implemented as a four-year plan – was established as a comprehensive project to accomplish new archeological research on the Northern Territories, based the results of research carried out from 2005 to 2013. In order to develop the studies carried out to date, the aim of this research was, firstly, to comprehensively clarify the Kuril Islands' history of human activity

and; secondly, to build friendly relations and further deepen museum exchanges and awareness of history in both regions by developing academic exchanges. As a result of the studies in 2015, six archeological sites from the Jomon culture, Zoku-Jomon culture and Satsumon culture periods were newly clarified on the Pacific coastal region of the central part of Kunashiri Island. Also, estimation of the production areas of obsidian used to make stone implements found on Kunashiri and Shikotan islands was carried out, and it was revealed that the obsidian used is limited to the Shirataki and Oketo areas of Hokkaido. In the academic exchange surveys, investigations were implemented at Hokkaido Museum as well as museums in Otaru and Yoichi, as well with regard to historic sites, cultural assets, history and culture.